時間制限や認知資源の消耗が道德ジレンマ場面での道德判断に及ぼす影響

相馬正史¹, 都築誉史², 千葉元氣¹

(¹立教大学現代心理学研究科, ²立教大学心理学部)

キーワード: 道德ジレンマ, 時間制限, 認知資源の消耗

A time pressure and cognitive depletion's effect of moral judgment in moral dilemma

Masashi SOMA¹, Tsusuki TAKASHI², Itsuki CHIBA¹

(¹Graduate school of Contemporary Psychology, ²College of Contemporary Psychology, Rikkyo University)

Key Words: moral dilemma, time pressure, cognitive depletion

目的

近年の意思決定研究は、道德ジレンマ場面での判断に関心がある。道德ジレンマとは、“1人を犠牲にして5人を救うことは道德的に適切かどうか”というように倫理的な葛藤をもたらす状況を指す。そこでは、義務論（規範や義務感を遵守する行動が道德的に正しいとする立場）と功利主義（道德的に正しい行動とは、結果により決定されるという倫理立場）の対立が問題となっている（Table1を参照）。多くの研究では、道德判断の二重過程理論を支持しており、それは義務論が自動・感情反応に基づき（システム1）、功利主義判断が熟考・認知コントロール反応に基づく（システム2）というものである（Greene, Sommerville, Nystrom, Darley & Cohen, 2001）。本研究は、初めに、時間制限と認知資源の消耗操作を行い、道德判断の二重過程理論を検証した。時間制限はシステム1を促し、義務論判断を増加するだろう。認知コントロールや熟考は認知資源（cognitive resource）。生理指標としてグルコースがあげられる）を有し、認知資源が不足している場合、直観思考が促進されることが知られている。また自己制御、複雑な課題、ストレス後には、認知資源が消耗することがわかっている（千葉・都築, 2012）。そこで本研究は、認知資源の消耗はシステム1を促し、義務論判断を増加すると予測した。

実験

道德ジレンマ課題は（Greene et al, 2001）、道德課題画面と回答画面からなる。道德課題画面では、実験参加者は、PCディスプレイに表示された道德ジレンマ課題の内容を読んだ（35秒間）。その後質問画面に移り、道德的に“適切”か“不適切”の選択肢から一つを選択した。ここでは“適切”は、功利主義判断を指す。時間制限群では、回答画面で8秒以内に回答してもらい、認知資源の消耗群や統制群は3分以内に回答してもらった。実験が終わった後、2度目の唾液アミラーゼの測定を行う（時間制限群と統制群のみ）。認知資源の消耗群では、認知資源の消耗課題を行い、その後、道德ジレンマ課題を遂行した。認知資源の消耗操作は、ストループ課題を用いた。

結果

実験参加者は大学生65人（男性16人、女性49人）である。選択比率を従属変数とし、実験群（時間制限群・認知資源消耗群・統制群）の1要因分散分析を行った結果、主効果が見られた（ $F(2, 61) = 4.715, p < .05$ ）。平均値はそれぞれ、時間制限群が.457、認知資源の消耗群が.454、統制群が.336である。下位検定の結果（TukeyのWSD検定）、時間制限群は、統制群よりも有意に高く（ $p < .01$ ）、認知資源消耗群は統制群よりも有意に高かった（ $p < .05$, Figure1を参照）。次に、反応時間を従属変数とした、道德判断（功利主義判断（適切）・義務論判断（不適切））と実験条件（時間制限・認知資源消耗・統制）の2要因分散分析を行った結果、道德判断（ $F(1, 256) = 5.804, p < .05$ ）と実験条件（ $F(1, 256) = 5.804, p < .01$ ）に主効果は有意であったが、交互作用は有意でなかった（ $F(1, 256) = .504, n.s.$ ）。功利主義判断と義務論判断の平均反応時間は、8.778ms, 5.753msであった。

考察

本研究では、時間制限や認知資源の消耗が、道德ジレンマ場面において、義務論判断を増加することを実験的に示した。このことは、道德ジレンマ場面での道德判断が、二重過程理論と一致することを示している。つまり、直観思考は義務論判断と、熟考思考は功利主義判断と対応するというのである。また、功利主義判断には、認知資源が必要であり、認知資源が足りない場合は義務論判断に傾くことも示された。また、先行研究と同様に、義務論判断を行うときの方が、功利主義判断を行うときよりも、反応時間が短いことを示した。このことは、義務論判断がシステム1と関連し、功利主義判断がシステム2と関連するという、道德判断の二重過程理論と一致する。Table1 倫理学の重要な2つの概念

義務論	功利主義
行為が人々に与える結果の善し悪しにかかわらず、世の中には守るべき義務や倫理原則があるという考え方	行為が人々に与える結果を重視する立場であり、最大多数の最大幸福につながる行為が倫理的に正しいとする考え方
直観的に想起されるもの。素早い反応。	目標への結果を重要視。長い時間を要する。熟考。

Figure1 各条件における選択比率

引用文献

- Greene, J. D., Sommerville, R. B., Nystrom, L. E., Darley, J. M., & Cohen, J. D. (2001). An fMRI investigation of emotional engagement in moral judgment. *Science*, **293**, 2105-2108.
- 千葉元氣・都築誉史(2012).多属性多肢選択意思決定における文脈効果と二重過程理論に関する研究動向：セルフコントロールと認知資源との相互関係. 立教大学心理学研究, **54**, 59-66.